

403 進行卵巣癌(Ⅲ,Ⅳ期)に対する自家骨髄移植併用大量化学療法の治療成績

東海大

村上 優, 米本幸世, 海老沢恒次, 宮本 壮,
篠塚孝男, 藤井明和

【目的】近年シスプラチンを主体とした化学療法の進歩により, 悪性卵巣腫瘍の予後は改善されつつある。しかしⅢ,Ⅳ期の進行悪性卵巣腫瘍においては化学療法により一次効果は得られても, 必ずしも長期予後の改善にはむすびついていない。そこで我々は, 自家骨髄移植併用大量化学療法を行った悪性卵巣腫瘍Ⅲ,Ⅳ期の進行例につき, いかなる症例が長期予後を得ているかを分析したので報告する。【方法】これまでに手術+自家骨髄移植併用大量化学療法を行った57例の中からⅢ,Ⅳ期症例で, 治療開始後1年以上経過した28例を対象とした。主なRegimenは大量CAP療法でCPM 2400mg/m², ADM 100mg/m², CDDP 150mg/m²を1クールとして, 原則として各々2クールずつ行った。

【成績】各臨床進行期別に1, 2, 3年生存率をみるとⅢ期では18/18, 11/13, 5/9(100, 84.6, 55.6%)。Ⅳ期では10/10, 5/6, 2/3(100, 83.3, 66.7%)であった。手術時に肉眼的に全て腫瘍を切除したと思われる根治術後の症例の行った補助化学療法群においては9/9, 7/8, 4/5(100, 87.5, 80.0%), 一方手術後にも残存腫瘍のある症例に行った治療的化学療法群では19/19, 9/11, 3/7(100, 81.8, 42.9%)であった。【結論】進行卵巣癌に対する自家骨髄移植併用大量化学療法の成績は補助化学療法群では良好な結果が得られたが, 治療的化学療法群では3年以後の生存率に著大な低下をきたした。したがって進行癌であっても初回手術時に可能な限り腫瘍を切除することが長期予後の改善にとって, 重要である。

404 長期予後よりみた進行卵巣癌の免疫化学療法

久留米大, 同免疫*

西村治夫, 浜口欣也, 立野信正, 松村 隆,
大蔵尚文, 岩永成晃, 薬師寺道明, 横山三男*

【目的】進行卵巣癌に対する免疫化学療法の有用性につき, 長期予後を主たる指標として検討した。

【方法】1982年1月~1985年10月に当科で初回手術を行い, 封筒法で免疫化学療法群と化学療法単独群に割り付けられ5年以上経過を追跡し得たⅢ・Ⅳ期卵巣腺癌患者51例を対象とした。化学療法は寛解導入療法を3コース以上行うこととし, 免疫化学療法は化学療法開始7日前よりOK-432 3KEを隔日に皮内投与した。解析は両群間の予後曲線の比較, 初回残存腫瘍径2cmを境とした各々での両群間生存曲線の比較, 免疫学的パラメータ-OKT4/8比の推移につき行った。割り付けられた両群の背景因子の比較は χ^2 検定およびt検定を用い, 生存曲線はKaplan Meier法により描記し, 生存率の差の検定はGeneralized Wilcoxon testにより行った。【成績】51例のうち中止, 脱落8例を除く43例を解析の対象とした。43例中免疫化学療法群は22例, 化学療法単独群は21例で, 両群の間には, 組織型, 期別, 年齢, PS, 残存腫瘍径, 化学療法の種類, SLO実施率の何れの因子においても偏りはみられなかった。残存腫瘍径を加味しない生存曲線の比較では, 僅かに免疫化学療法群で良好な傾向がみられたが有意差はなかった($p=0.059$)。残存腫瘍径2cm以下の比較では有意差はみられなかったが, 2cmを越えるものでは免疫化学療法群で有意に($p=0.038$)予後良好であった。また, OKT4/8比の推移に一定の傾向はみられなかったが, 5年生存者のみの比較では免疫化学療法群で正常値への回復が早かった。【結論】進行卵巣癌に対する免疫化学療法の有用性が実証された。特に2cmを越える腫瘍残存例に対しては意義あるものと思われた。